

# イギリス海岸

宮沢賢治

青空文庫



夏休みの十五日の農場実習の間に、私どもがイギリス海岸とあだ名をつけて、二日か三日ごと、仕事が一きりつくたびに、よく遊びに行つた処がありました。

それは本とうは海岸ではなくて、いかにも海岸の風をした川の岸です。北上川の西岸でした。東の仙人峠から、遠野を通り土沢を過ぎ、北上山地を横截つて来る冷たい猿ヶ石川の、北上川への落合から、少し下流の西岸でした。

イギリス海岸には、青白い凝灰質の泥岩が、川に沿つてずいぶん広く露出し、その南のはじめに立ちますと、北のはずれに居る人は、小指の先よりもっと小さく見えました。

殊ことにその泥岩層そうは、川の水の増ますたんび、奇麗きれに洗あらわれるもの  
ですから、何とも云いえず青白くさつぱりしていました。

ところどころ  
所々ところどころには、水増しの時できた小さな壺つぼ穴あなの痕あとや、またそ  
れがいくつも続つづいた浅あさい溝みぞ、それから亜炭あたんのかけらだの、枯かれた  
蘆あしきれだのが、一列れつにならんでいて、前の水増しの時にどこまで  
水が上ったかもわかるのでした。

日が強く照てるときは岩は乾かわいてまっ白に見え、たて横よこに走った  
ひび割われもあり、大きな帽子ぼうしを冠かむつてその上をうつつむいて歩くな  
ら、影法師かげぼうしは黒く落ちましたし、全まったくもうイギリスあたりの白は  
堊くあの海岸かいがんを歩あいでいるような気がするのでした。

町の小学校でも石いしの巻まきの近くの海岸に十五日も生徒せいとを連つれて行

きましたし、隣りの女学校でも臨海学校をはじめていました。

けれども私たちがの学校ではそれはできなかつたのです。ですから、生れるから北上の河谷の上流の方にはかり居た私たちにとつては、どうしてもその白い泥岩層をイギリス海岸と呼びたかつたのです。

それに実際そこを海岸と呼ぶことは、無法なことではなかつたのです。なぜならそこは第三紀と呼ばれる地質時代の終り頃、たしかにたびたび海の渚だつたからでした。その証拠には、第一にその泥岩は、東の北上山地のへりから、西の中央分水嶺の麓まで、一枚の板のようになつてずうつとひろがつていました。ただその大部分がその上に積つた洪積の赤砂利や礫

ローム ※、それから沖積の砂や粘土や何かおほに被おほわれて見えないだけのはなしでした。それはあちこちの川の岸や崖あしの脚あしには、きつとこの泥岩が顔を出しているのでもわかりましたし、また所々ところどころで掘り抜き井戸いどを穿うがつたりしますと、じきこの泥岩層そうにぶつつかるのでもしれました。

第二に、この泥岩は、粘土ねんどと火山灰かざんばいとまじつたもので、しかもその大部分だいぶぶんは静しずかな水の中で沈しずんだものなことは明らかでした。たとえばその岩には沈んでできた縞しまのあること、木の枝えだや莖くきのかけらの埋うずもれていること、ところどころにいろいろな沼地ぬまちに生はえる植しょくぶつ物が、もうよほど炭化たんかしてはさまっていること、また山の近くには細かい砂利のあること、殊ことに北上山地のへりには

所々この泥岩層の間に砂丘さきゆうの痕あとらしいものはさまっていることなどでした。そうしてみると、いま北上の平原へいげんになつてゐる所は、一度は細長い幅はば三里ばかりの大きなたまり水だつたのです。ところが、第三に、そのたまり水が塩しおからかつた証しょうこ拠こもあつたのです。それはやはり北上山地のへりの赤砂利から、牡蠣かきや何か、半鹹はんかんのところにてなければ住すまない介殼かいがらの化石かせきがしました。

そうしてみますと、第三紀の終り頃、それは或あるいは今から五、六十万年あるい或は百万年を数えるかも知れません、その頃今の北上の平原にあたる処ところは、細長い入海か鹹湖かんこで、その水は割わり合あい浅あさく、何万年の永ながい間には処ところ々々水面すいめんから顔を出したりまた引こつ込こん

だり、火山灰や粘土が上に積つもつたりまたそれが削けずられたりして  
たのです。その粘土は西と東の山地から、川が運はこんで流ながし込こんだ  
のでした。その火山灰かざんばいは西の二列れつか三列の石英粗面岩せきえいそめんがんの火山  
が、やつとしずまった処ところではありましたが、やつぱり時々噴火ふんかを  
やったり爆発ばくはつをしたりしていましたので、そこから降ふつて来た  
のでした。

その頃世界ころせかいには人はまだ居いなかつたのです。殊ことに日本はごくご  
くこの間、三、四千年前までは、全まったく人が居いなかつたと云いいます  
から、もちろん誰だれもそれを見てはいいなかつたでしょう。その誰も  
見ていない昔むかしの空がやつぱり繰くり返かえし繰くり返かえし曇くもつたりまた晴れ  
たり、海の一とこがだんだん浅あさくなつてとうとう水の上に顔を出

し、そこに草や木が茂り、ことにも胡桃の木が葉をひらひらさせ、  
 ひのきやいちいがまつ黒にしげり、しげったかと思うと忽ち西の  
 方の火山が赤黒い舌を吐き、軽石の火山礫は空もまっくらに  
 なるほど降つて来て、木は押し潰され、埋められ、まもなくまた  
 水が被さつて粘土がその上につもり、全くまっくらな処に埋めら  
 れたのでしよう。考えても変な気がします。そんなことはほんとう  
 だらうかと思われませんか。ところがどうも仕方ないことは、  
 私たちのイギリス海岸では、川の水からよほどはなれた処に、  
 半分石炭に変わった大きな木の根株が、その根を泥岩の中に張  
 り、そのみきと枝を軽石の火山礫層に押し潰されて、ぞろつと  
 ならんでいました。尤もそれは間もなく日光にあたってぼろぼろ

に裂<sup>さ</sup>け、度<sup>たび</sup>々<sup>たび</sup>の出<sup>つぎ</sup>水<sup>づ</sup>に次<sup>つぎ</sup>から次<sup>つぎ</sup>と削<sup>けず</sup>られて行<sup>い</sup>きま<sup>し</sup>たが、新<sup>あたら</sup>らしいものもまた出<sup>い</sup>て来<sup>き</sup>ました。そしてその根<sup>ね</sup>株<sup>くわ</sup>のまわりから、あ<sup>あ</sup>る時<sup>とき</sup>私<sup>わたし</sup>たちは四<sup>よ</sup>十<sup>じゅう</sup>近<sup>きん</sup>くの半<sup>はん</sup>分<sup>ぶん</sup>炭<sup>たん</sup>化<sup>か</sup>したく<sup>く</sup>るみ<sup>み</sup>の实<sup>み</sup>を拾<sup>ひろ</sup>いました。それは長<sup>なが</sup>さが二<sup>に</sup>寸<sup>すん</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>らい、幅<sup>はば</sup>が一<sup>いっ</sup>寸<sup>すん</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>らい、非<sup>ひ</sup>常<sup>じょう</sup>に細<sup>こ</sup>長<sup>なが</sup>く尖<sup>とが</sup>つた形<sup>かたち</sup>でしたので、はじめは私<sup>わたし</sup>どもは上<sup>うへ</sup>の重<sup>おも</sup>い地<sup>ち</sup>層<sup>そう</sup>に押<sup>お</sup>し潰<sup>つぶ</sup>されたの<sup>の</sup>だ<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>とも思<sup>おも</sup>いま<sup>し</sup>たが、縦<sup>たて</sup>に埋<sup>う</sup>ま<sup>つ</sup>てい<sup>る</sup>の<sup>の</sup>もあ<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>したし、や<sup>や</sup>っ<sup>ぱ</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>じ<sup>じ</sup>め<sup>め</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>そ<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>形<sup>かたち</sup>だ<sup>だ</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>思<sup>おも</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>した。

それ<sup>それ</sup>から<sup>から</sup>は<sup>は</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>木<sup>き</sup>の<sup>の</sup>実<sup>み</sup>も<sup>も</sup>見<sup>み</sup>附<sup>つ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>した。小<sup>こ</sup>さ<sup>さ</sup>な<sup>な</sup>草<sup>くさ</sup>の<sup>の</sup>実<sup>み</sup>も<sup>も</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>さん<sup>さん</sup>出<sup>い</sup>て<sup>て</sup>来<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>した。

この百<sup>ひゃく</sup>万<sup>まん</sup>年<sup>ねん</sup>昔<sup>むかし</sup>の<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>の<sup>の</sup>渚<sup>なぎさ</sup>に、今<sup>いま</sup>日<sup>にち</sup>は<sup>は</sup>北<sup>きた</sup>上<sup>がは</sup>川<sup>がわ</sup>が<sup>が</sup>流<sup>なが</sup>れ<sup>て</sup>い<sup>ま</sup>す。昔<sup>むかし</sup>、巨<sup>おお</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>波<sup>なみ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>たり、じ<sup>じ</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>寂<sup>しず</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>たり、誰<sup>だれ</sup>も<sup>も</sup>誰<sup>だれ</sup>も<sup>も</sup>見<sup>み</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>所<sup>ところ</sup>

でいろいろに変わったその巨きな鹹水かんすいの継承者けいしょうしゃは、今日は波にちらちら火を点じ、ぴたぴた昔むかしの渚なぎさをうちながら夜昼南へ流れながるのです。

ここを海岸かいがんと名をつけたってどうしていけないといわれましようか。

それにも一つここを海岸と考えていいわけは、ごくわずかですけれども、川の水が丁度ちやうど大きな湖みずうみの岸のように、寄せたり退ひいたりしたのです。それは向う側むこうがわから入って来る猿さるヶ石川いしとこちらの水がぶつつかるためにできるのか、それとも少し上流じやうりゆうがかなりけわしい瀬せになってそれがこの泥岩層でいがんそうの岸にぶつつかって戻もどるためにできるのか、それとも全くほかの原因げんいんによるのでし

ようか、とにかく日によつて水が潮しほのように差さし退ひきするときがあるのです。

そうです。丁度がつき一学期しけんの試験しけんが済すんでその採点さいてんも終おりあとは三十一日に成績せいせきを発はつびよう表ひょうして通信簿つうしんぼを渡わたすだけ、私わたくしのほうから云いえばまあそうです、農場のうじょうの仕事しごとだつてその日の午前むぎで麦うんぼんの運搬うんぱんも終おり、まあ一段落いちだんらくというそのひるすぎでした。私たちは今年三度目どめ、イギリス海岸へ行きました。瀬川せがわの鉄橋てつきょうを渡り牛蒡ごぼうや甘藍かんらんが青白い葉はの裏うらをひるがえす畑はたけの間の細い道を通りました。

みちにはすずめのかたびらが穂ほを出だしていっぱいにかぶさつていました。私たちはそこから製板所せいばんしょの構内こうないに入りました。製

板所の構内だということはおくもくした新らしい鋸屑おがくずが敷かれ、  
 鋸のこぎりの音が気まぐれにそこを飛とんでいたのでわかりました。鋸屑おがくずに  
 は日が照てつて恰ちやうど砂すなのようでした。砂の向うの、青い水と救きゆう  
 助じやくい区域きの赤い旗はたと、向うのブリキ色の雲とを見たとき、いき  
 なり私どもはスウェーデンの峽湾きやうわんにでも来たような気がして  
 どきつとしました。たしかにみんなそう云う気もちらしかったの  
 です。製板ちよかべの小屋こやの中は藍あゐいろの影かげになり、白く光る円鋸まるのこが四、  
 五ちよかべ椀壁わんにならべられ、その一椀は軸じくにとりつけられて幽霊ゆうれいのよ  
 うにまわっていました。

私たちはその横よこを通つて川の岸まで行つたのです。草の生えた  
 石垣いしがきの下、さっきの救助区域の赤い旗の下には筏いかだもちょうど来

ていました。花城かじょうや花巻はなまきの生徒せいとがたくさん泳およいでおりました。けれども元来私どもはイギリス海岸に行こうと思つたのでしたからだまってそこを通りすぎました。そしてそこはもうイギリス海か岸いがんの南のはじなのでした。私わたくしたちでなくたつて、折角せつかく川の岸までやって来ながらその気持きもちのいい所ところに行かない人はありません。町の雑貨商店ざつかしやうてんや金物店かなものてんの息子むすこたち、夏やすみで歸つたあちこちの中ちゆうとう等と学校の生徒せいと、それからひるやすみの製板せいばんの人たちなどが、あるいは裸はだかになつて二人、三人ずつそのまっ白な岩いわに座すわつたり、また網あみシャツやゆるい青の半ずぼんをはいたり、青白い大きな麦稈帽むぎわらぼうをかぶつたりして歩いてのを見ていくのは、ほんとうにいい気持きもちでした。

そしてその人たちが、みな私どもの方を見てすこしわらつてい  
るのです。殊ことに一番いいことは、最上等さいじょうとうの外国犬が、向うか  
ら黒い影法師かげぼうしと一緒いっしょに、一目散いちもくさんに走つて来たことでした。  
実じつにそれはロバートとでも名の附つきそうなもじやもじやした大き  
な犬でした。

「ああ、いいな。」私どもは一度いちどに叫さけびました。誰だれだつて夏海岸  
へ遊あそびに行きたいと思わない人があるでしょうか。殊ことにも行けた  
ら、そしてさらわれて紡績工場ぼうせきこうじょうなどへ売られてあんまりひど  
い目にあわれないなら、フランスかイギリスか、そう云う遠い所ところへ  
行きたいと誰も思うのです。

私たちは忙いそがしく靴くつやずぼんを脱ぬぎ、その冷つめたい少し濁にごった水へ

次つぎから次と飛び込みました。全くその水の濁りようときたら素敵すてきに高こう尚しょうなもんでした。その水へ半分顔を浸ひたして泳およぎながら横よ目こめで海岸の方を見ますと、泥岩でいがんの向うのはずれは高い草の崖がけになつて木もゆれ雲もまっ白に光りました。

それから私たちは泥岩の出張でばつた処ところに取りついてだんだん上りました。一人の生徒はスイミングワルツの口笛くちぶえを吹ふきました。私たちのなかでは、ほんとうのオーケストラを、見たものも聴きいたことのあるものも少なかつたのですから、もちろんそれは町の洋品屋ようひんやの蓄音器ちくおんきから来たのですけれども、恰度ちやうどそのように冷ない水は流ながれたのです。

私たちは泥岩層そうの上をあちこちあるきました。所々に壺穴つぼあなの

痕あとがあつて、その中には小さな円い砂利じやりが入っていました。

「この砂利がこの壺穴ほを穿ほるのです。水がこの上を流れるでしょう、石が水の底そこでザラザラ動うごくでしょう。まわったりもするでしょう、だんだん岩が穿れていくのです。」

また、赤い酸化鉄さんかてつの沈しずんだ岩の裂け目さに沿そつて、層そうがずうつと溝みぞになつて窪くぼんだところもありました。それは沢山たくさんの壺穴つぼあなを連れん結けつしてちようどひようたんをつないだように見えました。

「こう云いう溝は水の出るたんびにだんだん深ふかくなるばかりです。なぜなら流ながされて行く砂利じやりはあまりこの高い所ところを通りません。溝の中ばかりころんで行きます。溝は深くなる一方でしょう。水の中をごろんなさい。岩がたくさん縦たての棒ぼうのようになっています。」

みんなこれです。」

「ああ、騎兵だ、騎兵だ。」誰かが南を向いて叫びました。

下流のまつ青な水の上に、朝日橋がくつきり黒く一列浮び、

そのらんかんの間を白い上着を着た騎兵たちがぞろつと並んで行きました。馬の足なみがかげろうのようにちらちら光りました。それは一中隊ぐらいで、鉄橋の上を行く汽車よりはもつとゆるく、小学校の遠足の列よりはもう少し早く、たぶんは中隊長らしい人を先頭にだんだん橋を渡って行きました。

「どごさ行くのだべ。」

「水馬演習でしょう。白い上着を着ているし、きつと裸馬

だろう。」

「こつちさき来るどいいな。」

「来るよ、きつと。大てい向う岸のあの草の中から出て来ます。

兵隊だつて誰だつて気持ちのいい所へは来たいんだ。」

騎兵はだんだん橋を渡り、最後の一人がぼろつと光つて、それ

からみんな見えなくなりました。と思うと、またこつちの袂から

一人がだくでかけて行きました。私たちはだまつてそれを見送り

ました。

けれども、全く見えなくなると、そのこともだんだん忘れるも

のです。私たちはまた冷たい水に飛び込んで、小さな湾になつた

所を泳ぎまわつたり、岩の上を走つたりしました。

誰かが岩の中に埋もれた小さな植物の根のまわりに、水酸

化鉄の茶いろな環わが、何なんじゆう重おももめぐつているのを見附みつけました。それははじめからあちこち沢山たくさんあつたのです。

「どうしてこの環わ、出来だのす。」

「この出来かたはむずかしいのです。膠質こうしつたい体のことをも少し詳くわしくやってからでなければわかりません。けれどもとにかくこれは電氣の作用です。この環はリーゼガングの環わと云いいます。実じつ験室けんしつでもこさえられます。あとで土壤どじやうのほうでも説明せつめいします。腐植質ふしよくしつばんそう磐層ばんそうというものも似たにようなわけのできるのですから。」私は毎日の実習じつしゆうで疲つかれていましたので、長い説明が面倒めんどうくさくてこう答えました。

それからしばらくたって、ふと私は川の向むこう岸ぎしを見ました。せ

いの高い二本のでんしんばしらが、互たがいによりかかるとして一本の腕木うでぎでつらねられてありました。そのすぐ下の青い草の崖がけの上に、まさしく一人のカアキイ色の将校しょうこうと大きな茶いろの馬の頭とが出て来ました。

「来た、来た、とうとうやって来た。」みんなは高く叫さけびました。「水馬演習すいばえんしゅうだ。向う側むこうへ行こう。」こう云いながら、そのまっ白ないギリス海岸かいがんを上流じょうりゅうにのぼり、そこから向う側およへ泳いで行く人もたくさんありました。

へいたい兵隊へいたいは一列れつになつて、崖をななめに下り、中にはさきに黒い鉤かぎのついた長い竿さおを持った人もありました。

間もなく、みんなは向う側の草の生えた河原かわらに下り、六列れつばかり

りに横よこにならんで馬から下り、将校の訓示くんじを聞いていました。それが中々なが永かつたのでこつち側に居いる私たちは実際じつさいあきてしまいました。いつになつたら兵隊たちがみな馬のたてがみに取りとりついで、泳いでこつちへ来るのやらすつかり待まちあぐねてしましました。さつき川を越こえて見に行つた人たちも、浅瀬あさせに立つて将校の訓示を聞いていましたが、それもどうも面おも白しろくて聞いているようにも見え、またつまらなそうにも見えるのでした。うるんだ夏の雲の下です。

そのうちとうとう二隻せきの舟ふねが川下からやつて来て、川のまん中にとまりました。兵隊たちはいちばんはじめの列から馬をひいてだんだん川へ入りました。馬の蹄ひづめの底そこの砂利じやりをふむ音と水のばちや

ばちやはねる音とが遠くの遠くの夢の中からも来るように、こ  
つち岸ぎしの水の音を越こえてやって来ました。私わたくしたちはいまにだんだ  
ん深ふかい処ところへささえ来れば、兵隊へいたいたちはたてがみにとりついて泳およぎ  
出すだろうと思つて待まっていました。ところが先頭の兵隊さんは  
舟ふねのところまでやって来ると、ぐるつとまわつて、また向むこうへ戻もど  
りました。みんなもそれに続つづきましたので列れつは一つの環わになりま  
した。

「なんだ、今日はただ馬を水にならすためだ。」私たちはなんだ  
かつまらないようにも思いましたが、また、あんな浅あさい処ところまでし  
か馬を入れさせずそれに舟を二隻せきも用意よういしたので見てどこか大へ  
ん力強い感じもしました。それから私たちは養よう蚕さんの用もありま

したので急いで学校に帰りました。

その次には私たちはただ五人で行きました。

はじめはこの前の湾のところで泳いでいましたがそのうちだんだん川にもなれてきて、ずうっと上流の波の荒い瀬のところから海岸のいちばん南のいかだのあるあたりへまでも行きました。そして、疲れて、おまけに少し寒くなりましたので、海岸の西の堺のあの古い根株やその上にもった軽石の火山礫層の処に行きました。

その日私たちは完全全なくなるみの実も二つ見附けたのです。火山礫の層の上には前の水増しの時の水が、沼のようになつて処々溜っていました。私たちはその溜り水から堰をこしらえて滝にし

たり発電<sup>はつでん</sup>処<sup>しよ</sup>のまねをこしらえたり、ここはオーバアフロウだの何<sup>な</sup>の永<sup>なが</sup>いこと遊<sup>あそ</sup>びました。

その時、あの下<sup>かりゆう</sup>流<sup>りゆう</sup>の赤<sup>はた</sup>旗<sup>はた</sup>の立<sup>た</sup>つているところに、いつも腕<sup>うで</sup>に赤<sup>あか</sup>いきれを巻<sup>ま</sup>きつけて、はだかに半<sup>はんてん</sup>天<sup>てん</sup>だけ一枚<sup>まいき</sup>着<sup>き</sup>てみんなの泳<sup>およ</sup>ぐのを見<sup>み</sup>ている三十<sup>さんじゅう</sup>ばかりの男<sup>おとこ</sup>が、一<sup>ちよう</sup>艇<sup>てい</sup>の鉄<sup>てつ</sup>艇<sup>てい</sup>をもつて下<sup>すい</sup>流<sup>りゆう</sup>の方<sup>のほ</sup>から溯<sup>のぼ</sup>つて来る<sup>くる</sup>のを見<sup>み</sup>ました。その人<sup>ひと</sup>は、町<sup>まち</sup>から、水<sup>すい</sup>泳<sup>えい</sup>で子<sup>こども</sup>供<sup>ども</sup>らの溺<sup>おぼ</sup>れるのを助<sup>たす</sup>けるために雇<sup>やと</sup>われて来<sup>き</sup>ているのでした。が、何<sup>なに</sup>ぶんひまに見<sup>み</sup>えたのです。今日<sup>けふ</sup>だつて実<sup>じつ</sup>際<sup>さい</sup>ひまなもんだから、ああやつて用<sup>もち</sup>もない鉄<sup>てつ</sup>艇<sup>てい</sup>なんかかついで、動<sup>うご</sup>かさなくてもいい途<sup>と</sup>方<sup>ほう</sup>もない大きな石<sup>いし</sup>を動<sup>うご</sup>かそうとしてみたり、丁<sup>ちよう</sup>度<sup>ど</sup>私<sup>わたし</sup>どもが遊<sup>あそ</sup>びにしている発電<sup>はつでん</sup>所<sup>じよ</sup>のまねなどを、鉄<sup>てつ</sup>艇<sup>てい</sup>まで使<sup>つか</sup>つて本<sup>ほん</sup>統<sup>とう</sup>にごつご

つ岩を掘つて、浮岩の層のたまり水を干そうとしたりしているのだと思うと、私どもは実は少しおかしくなつたのでした。

ですからわざと真面目な顔をして、

「この水少し干したほうがいいな、鉄槌を貸しませんか。」と云うものもありました。

するとその男は鉄槌でとんとんあちこち突いてみてから、

「ここら、岩も柔いようだな。」と云いながらすなおに私たちに貸し、自分はまた上流の波の荒いところに集っている子供らの方へ行きました。すると子供らは、その荒いブリキ色の波のこつち側で、手をあげたり脚を俥屋さんのようにしたり、みんなちりぢりに遁げるのでした。私どもはははあ、あの男はやつぱり

どこか足りないな、だから子供らが鬼おにのようにこわがっているのだと思つて遠くから笑わらつて見ていました。

さてその次つぎの日も私たちはイギリス海かい岸がんに行きました。

その日は、もう私たちはすっかり川の心こころ持もちになれたつもりで、どんどん上流せの瀬せの荒い処ところから飛び込とみ、すっかり疲つかれるまで下流かりゆうの方かたへ泳およぎました。下流であがつてはまた野蠻人やばんじんのよ

うにその白い岩の上を走つて来て上流の瀬にとびこみました。そ

れでもすっかり疲れてしまうと、また昨日の軽石層かるいしそうのたまり水の処に行きました。救助きゆうじょ係がかりはその日はもうちやんとそこに

来ていたのです。腕うでには赤い巾きれを巻き鉄槌もも持っていました。

「お暑あつうござんす。」私が挨拶あいさつしましたらその人は少しきまり

悪<sup>わる</sup>そうに笑つて、

「なあに、おうちの生徒<sup>せいと</sup>さんぐらい大きな方ならあぶないこともないのですが、一寸<sup>ちよつと</sup>来てみたところですよ。」と云うのでした。なるほど私たちの中でたしかに泳げるものはほんとうに少かつたのです。もちろん何かの張<sup>はり</sup>合<sup>あい</sup>で誰<sup>だれ</sup>かが溺<sup>おほ</sup>れそうになつたとき間違<sup>まちが</sup>いなくそれを救<sup>すく</sup>えるというくらいのもは一人もありませんでした。だんだん談<sup>はな</sup>してみると、この人はずいぶんよく私たちを考え<sup>かんが</sup>ててくれたのです。救助<sup>くいき</sup>区域<sup>くいき</sup>はずうつと下流<sup>いかだ</sup>の筏<sup>いかだ</sup>のところなのですが、私たちがこの気もちよいイギリス海岸に来るのを止めるわけにもいかず、時々別<sup>べつ</sup>の用のあるふりをして来て見ていてくれたのです。もつと談<sup>はな</sup>しているうちに私はすっかりきまり悪くなつ

てしまいました。なぜなら誰でも自分だけは賢く、人のしていることは馬鹿げて見えるものですが、その日そのイギリス海岸で、私はつくづくそんな考のいけないことを感じました。からだを刺されるようにさえ思いました。はだかになつて、生徒といつしよに白い岩の上に立っていました。まるで太陽の白い光に責められるように思いました。全くこの人は、救助区域があまり下流の方で、とてもこのイギリス海岸まで手が及ばず、それにもかかわらず私たちをはじめみんなこつちへも来るし、殊に小さな子供らまでが、何べん叱られてもあのあぶない瀬の処に行つていて、この人の形を遠くから見ると、遁げてどての蔭や沢のはんのきのうしろにかくれるものですから、この人は町へ行つて、

もう一人、人を雇うかそうでなかったら救助の浮標を浮べてもらいたいと話しているというのです。

そうしてみると、昨日あの大きな石を用もないのに動かそうとしたのもその浮標の重りに使う心組からだつたのです。おまけにあの瀬の処では、早くにも溺れた人もあり、下流の救助区域でさえ、今年になつてから二人も救つたというのです。いくら昨日までよく泳げる人でも、今日のからだ加減では、いつ水の中で動けないようになるかわからないというのです。何気なく笑つて、その人と談してはいましたが、私はひとりで烈しく烈しく私の軽率を責めました。実は私はその日までもし溺れる生徒ができたら、こつちはとても助けることもできないし、ただ飛び込んでい

つて一いっしょ緒しよに溺れてやろう、死ぬことの向むこう側がわまで一いっしょ緒しよについて  
 行ってやろうと思つていただけでした。全く私たちにはそのイギ  
 リス海岸の夏のいっごく一刻いっごくがそんなにまで楽しかったのです。そして  
 私は、それが悪いことだとは決けつして思いませんでした。

さてその人と私らは別わかれましたけれども、今こんど度はもう要ようじん心しん  
 て、あの十間けんばかりの湾わんの中でしか泳ぎませんでした。

その時、海岸のいちばん北のはじめまで溯のぼつて行つた一人が、ま  
 つすぐに私たちの方へ走つて戻もどつて来ました。

「先生、岩に何かの足あし痕あとあらんす。」

私はすぐ壺つばあな穴あなの小さいのだろうと思ひました。第三だい紀きの泥でい  
 岩いんで、どうせ昔むかしの沼ぬまの岸きしですから、何か哺乳類ほにゆうるいの足あし痕あとのあ

ることともいかにもありそうなことだけれども、教室でだって手しゅじ  
 獣ゆうの足痕あしあとの図こくばんまで黒板こくばんに書いたのだし、どうせそれが頭に  
 あるから壺穴くわいまでそんな工合ぐあいに見えたんだと思ひながら、あんま  
 り気乗きのりもせずきにそっちへ行つてみました。ところが私はぎくり  
 としてつつ立つてしまいました。みんなも顔色を変えて叫さけんだの  
 です。

白かざんばいそうい火山灰層かざんばいそうのひとところが、平たいらに水で剥はがされて、浅あさい  
 幅はばの広い谷おおきのようになつていましたが、その底そこに二つずつ蹄ひづめの痕あと  
 のある大おおきき五寸すんばかりの足あとが、幾いくつか続つづいたりぐるつとまわ  
 ったり、大きいおおきのや小さいちひさいのや、実じつにめちやくちやについている  
 ではありませんか。その中には薄うすく酸さん化鉄かてつが沈ちん澱でんしてあたり

の岩から実にはつきりしていました。たしかに足痕が泥どろにつくや否いなや、火山灰がやって来てそれをそのまま保存ほぞんしたのです。私ははじめは粘土ねんどでその型かたをとろうと思いましたが、一人がその青い粘土も持もつて来たのでしたが、蹄の痕があんまり深過ふかすぎるので、どうもうまくいきませんでした。私は「あした石膏せつこうを用意よういして来よう」とも云いいました。けれどもそれよりいちばんいいことはやつぱりその足あとを切り取とつて、そのまま学校へ持もつて行いつて標ひ本ほんにすることでした。どうせまた水が出れば火山灰の層そうが剥むげて、新らしい足あとの出るのはたしかでしたし、今のは構かまわないでおいてもすぐ壊こわれることが明らかでしたから。

次つぎの朝早く私わたしは実習じっしゅうを掲示けいじする黒板にこう書いておきまし

た。

八月八日

農場実習 午前八時半より正午まで

除草、追肥 第一、七組

蕪菁播種 第三、四組

甘藍中耕 第五、六組

養蚕実習 第二組

(午後イギリス海岸に於て第三紀偶蹄類の足跡標本を採収すべきにより希望者は参加すべし。)

そこで正直を申しますと、この小さな「イギリス海岸」の原

稿は八月六日あの足あとを見つける前の日の晩宿直室で

半分書いたのです。わたくし私はあの救助係きゆうじよがかりの大きな石を鉄槌かねてこで動かすあたりから、あとは勝手に私の空想くうそうを書いていこうと思つていたのです。ところが次の日救助係がまるでちがった人になつてしまい、泥岩でいがんの中からは空想よりももつと変なへんあしあとなどが出てきたのです。その半分書いた分だけを実習じっしゆうがすんでから教室でみんなに読みました。

それを読んでしまうかしまわないうち、私たちは一ぺんに飛び出してイギリス海岸へ出かけたのです。

丁度ちようどこの日は校長も出張から帰つて来て、学校に出ています。黒板こくばんを見てわらつていました、それから繭まゆを売るのが済んだら自分も行こうと云うのでした。私たちは新らしい鋼鉄こうてつの三

本鋏ぐわ一本と、ものさしや新聞紙などを持って出て行きました。海岸の入口に来てみますと水はひどく濁にごっていましたし、雨も少し降りふそうでした。雲が大へんけわしかったのです。救助係に私は今日は少しのお礼れいをしようと思つてその支度したくもして来たのでしたがその人はいつもの処ところに見えませんでした。私たちはまっすぐにそのイギリス海岸を昨日きのうの処に行きました。それからいねいにあのあやしい化石かせきを掘ほりはじめました。気がついてみると、みんな大抵たいていポケットに除草鎌じよそうがまを持ってきているのでした。岩が大へん柔やわらかでしたから大丈夫だいじょうぶそれで削けずれる見当がついていたのでした。もうあちこちで掘り出されました。私はせわしくそれをとめて、二つの足あとの間かんかく隔かくをはかったり、スケッチをとった

りしなければなりませんでした。足あとを二つつづけて取ろうと  
している人もありましたし、も少しのところでごわした人もあり  
ました。

まだ上流じょうりゅうの方にまた別のべつがあると、一人の生徒せいとが云つて走  
つて来ました。私は暑いあつので、すっかりはだかになって泳ぐおよ時の  
ようなかたちをしていましたが、すぐその白い岩を走つて行つて  
みました。そのあしあとは、いままでのとはまるで形もちがい、  
よほど小さかったのです、あるものは水の中に取りました。水が  
もつと退ひいたらまだまだ沢たくさん山出るだろうと思われました。その  
上流の方から、南のイギリス海岸のまん中で、みんなの一生けん  
命掘り取ほとつているのを見ますと、こんどはそこは英えい国こくでなく、

イタリヤのポンペイの火山灰かざんばいの中のように思われるのでした。殊ことに四、五人の女たちが、けばけばしい色の着物きものを着て、向うむこを歩いていましたし、おまけに雲がだんだんうすくなつて日がまっ白しろに照てつてきたからでした。

いつか校長も黄いろの實習服じっしゅうふくを着て来ていました。そして足あととはもう四つまで完全かんぜんにとられたのです。

私わたくしたちはそれを汀みぎわまで持もつて行いつて洗あらいそれからそつと新聞紙しんぶんに包つつみました。大きなのは三貫目さんかんめもあつたでしょう。掘り取るのが済すんであの荒あらい瀬せの処ところから飛とび込んで行くものもありました。けれども私はその溺おぼれることを心配しんぱいしませんでした。なぜなら生徒せいとより前に、もう校長が飛び込んでいてごくゆっくり泳およいで行

くのでしたから。

しばらくたつて私たちはみんなでそれを持って学校へ帰りま  
した。そしてさつきも申しましたようにこれは昨日のことです。今  
日は実習の九日目です。朝から雨が降っていますので外の仕  
事はできません。うちの中で図を引いたりして遊ぼうと思うので  
す。これから私たちにはまだ麦こなしの仕事が残っています。天  
気が悪くてよく乾かないで困ります。麦こなしは芒がえらえらか  
らだに入つて大へんつらい仕事です。百姓の仕事の中ではい  
ちばんいやだとみんなが云います。この辺ではこの仕事を夏の病  
気とさえ云います。けれども全くそんな風に考えてはすみませ  
ん。私たちはどうかしてできるだけ面白くそれをやろうと思

うのです。

(二九二三、八、九)

# 青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# イギリス海岸

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>